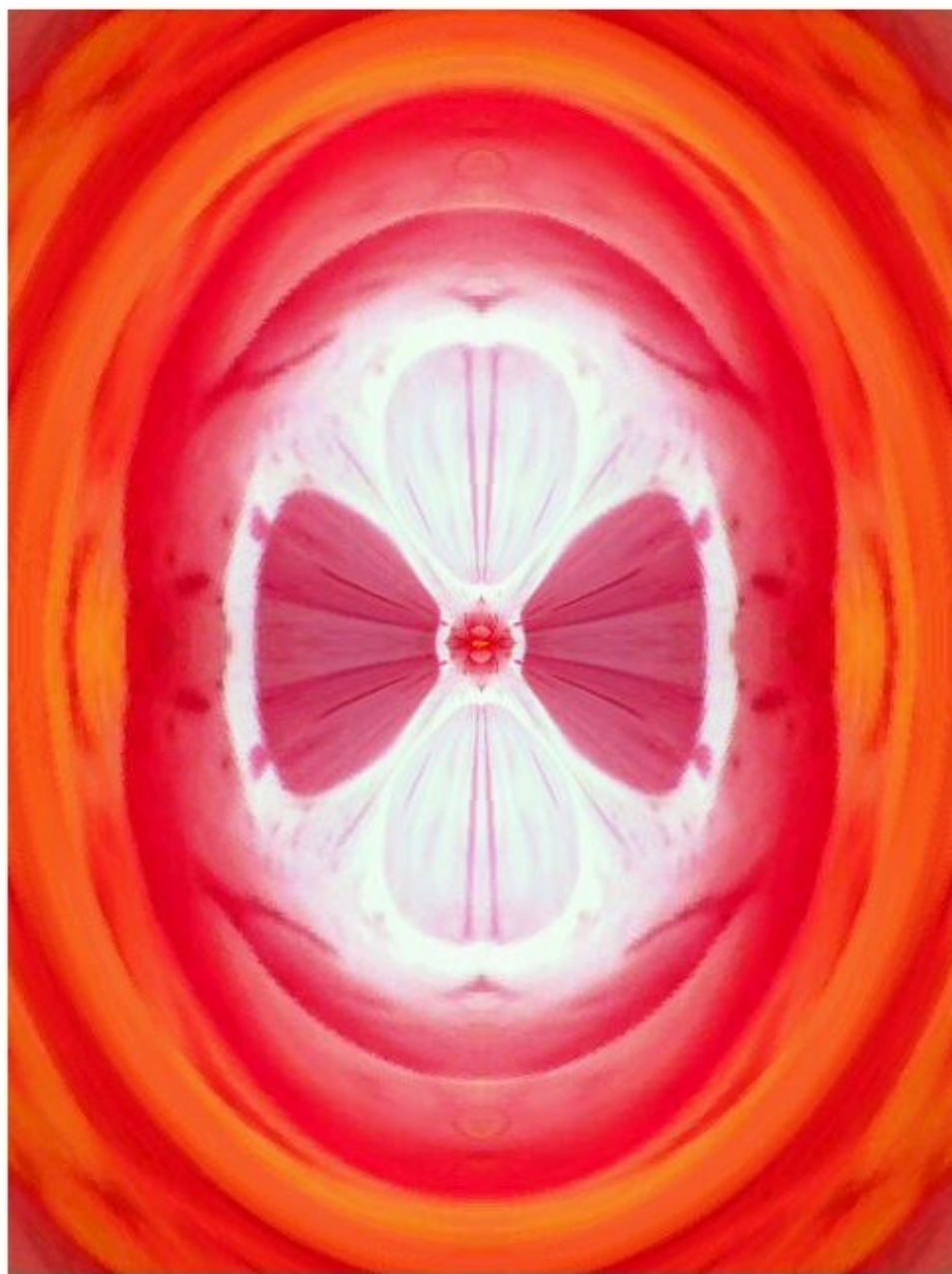


おつまみ海苔



mikatuki98

<おつまみ海苔うにの味>を1枚2枚とおつまみして、何枚目になったのかわからなくなったところで食べるのを止めた。

舌が塩辛い信号を出してきたのを脳がキャッチしたらしい。

ついでに脳は水分を要求して来たが、あいにくマグカップのお茶は飲み干し、グラスの<純米酒無法松>も一滴も残っていなかった。

何も口にできるものが無いなと思ったところへ、キャンディーが3つばかり転がっていたのに気づいて紫色の包み紙の分を開け中身を取り出すと透明だった。

「透明？ 何味なんだ？」

ポイと口に放り込むとハッカの味だった。

ハッカ味なんて何年振りに口にしていることだろう？

ハッカ味と分かっていたら、きっと口にしなかつたろうなと思いながら途中で吐き出したくなった。

まるで歯磨きの後のような口中。

だけど実際は歯磨きをした訳ではないので、結局、口中は気持ち悪いまま。

キスをする前にミントのガムをしきりに食べていた男を思い出して、余計にムカムカして来た。

ふと<おつまみ海苔うめの味>が目に入ったが、さすがに手は出ない。

とりあえずハッカの飴を口から出してティッシュで包み捨てた。

丁度ストーブの灯油が無くなり火が消えかかっている。

本日の吾エネルギーも消えかかっている。

ポッ・ポッと炎が消えて行く音。

そんなストーブの音に、丸々と太った元気なハエが帰宅するとまとわりついて来た時の羽音を思い出している。

心に寄り添ってくれる音たちが妙に愛しく感じる夜だ。了